



かたぎり ゆき
片桐 由喜 教授

企業法学科・社会保障法

平成元年 3月 北海道大学法学部卒業
平成 7年 3月 北海道大学法学研究科博士後期課程退学
平成 7年 4月 小樽商科大学助教授
平成17年10月 小樽商科大学教授
平成18年 4月より小樽商科大学企業法学科長

北海道新聞の連載コラム、いつも興味深く読ませていただいております。不特定多数の読者向けの記事にはいろいろとご苦労もあるかと思いますが...

片桐：この3月で丸2年になります。ネタはいよいよ尽きかけていますが(笑)。コラムを書く上で気をつけているのは、とにかく調べを入念にすることと、社会問題となっているテーマについては当事者の一方だけを批判しないということです。たとえば、ある老人福祉施設に虐待があったとしても、すべての老人福祉施設に問題があるわけではありません。また、その施設においても表面に出てこない事情があるのかもしれませんが。相手方が反論できない状況において一方的に批判するというのは正しくないと思うのです。ですので、記事として取り上げる場合には、単純な批判ではなく、問題の背景にどのようなことがあるのかということとを解説するようにしています。

そのような経験は教育や研究に影響していますか。

片桐：他にもいくつか外部の仕事をしていますが、こうした仕事を通じて、とてもよい勉強をさせていただいていると感じています。たとえば、福祉施設の苦情解決や労使関係に関する委員の仕事を通じて、実際の厳しい状況を知ることができます。このような現実を知ることが研究を進める上でも、とても重要なことだと思っています。

現実に根をおろした 研究・教育を心がけています。

片桐由喜教授は北海道新聞の連載コラム『片桐由喜先生のこう見よう読む』で道民の方々にも広く親しまれている先生です。ご専門は「社会保障法」。インタビューのなかで興味深かったのは、先生の研究的関心が法制度のみにとどまるものではなく、背景にある文化や歴史、さらには人間性への理解にまで向けられていることでした。

社会保障の研究は、文献に基づく研究も大切なのですが、それだけではなく、人々の現実の生活への視点というものが不可欠なのです。そこで、上記の仕事を通して得た活きた経験や知見をゼミや講義を通して学生にフィードバックするようにしています。

ご専門は英国と韓国の社会保障で、両国に留学されていたそうですが、この2国を対象とする理由はどのようなものでしょうか。

片桐：他国の制度を調べる目的は、日本への示唆を考えることにあります。たとえば英国は、産業革命が始まり資本主義が最も発達した国の一つですが、医療費が原則無料であるなど社会主義的な面があります。英国で生活し、さまざまな人と出会うなかで、そうした博愛的な制度に、彼らの文化や宗教観が深く関わっていることを感じました。

韓国の方は、国の制度自体は未発達なのですが、興味深いのは、それを補うように民間の機関(インフォーマル・セクター)が発達していることです。また、企業からの寄付が定着していますし、市民の間にも日常的に寄付があります。つまり、国民同士で助けあう相互扶助がシステムとして社会に組み込まれています。日本は今後、少子高齢化が進行し、国の財政は厳しくなっていくので、韓国から得られる示唆はあるでしょう。

日本でも今後、そうした相互扶助の流れになるのでしょうか。

片桐：単純にそうとはいえないでしょうね。日本の国民には高い税金を払っている、生活保障は国家の責任であるという意識があります。ただ、小樽のように財政的に厳しいなかで「雪あかりの路」を行政主導ではなくて市民のボランティアで行うとか、ボランティアによる高齢者への除雪サービスのように、散発的ではありますが、始まっているところでは

始まっているように思います。今後、行政当局が市民どうしの助け合いを促進するシステムを考案したり、何か動機付けを与えるならば、広がっていくかもしれません。

最後に商大生にメッセージをいただけますか。

片桐：私たち教師は日頃、学生たちに勉強しなさいといい、またより良い就職先を見つけることができるよう大学をあげて支援しています。大学そのものが学生を大人が好ましいと思う枠の中にはめようとしています。だから、このことを柵に上げて学生に何かをいうのは大変矛盾を感じるし、申し訳なく思います。それでもあえて、学生たちに求めるのは、若き日には停滞や失敗を恐れずに、何かに夢中になったり挑戦してほしいということ。部活や映画鑑賞、好きな漫画家の漫画読破、小樽市内のケーキ食べつくし、なんでもかまいません。

大学卒業後に飛び込む社会は思うようにいくことばかりではなく傷つく経験も多くあります。そうしたときに、学生時代に何かをやり遂げたとする経験は自信となって、立ち直るきっかけとなるのではないのでしょうか。「商大は小樽の誇り」とおっしゃる小樽の方がいます。学生の皆さんには自分の可能性を信じ、時には他人の期待に応えようとする気概をもってほしいと思います。



北海道新聞
連載コラム